慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 経済発展段階説の構造：経済史研究序説 |
| Sub Title | |
| Author | 高村, 象平 |
| Publisher | 慶應義塾理財学会 |
| Publication year | 1932 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.26, No.10 (1932. 10) ,p.2101(595)- 2132(626) |
| JaLC DOI | 10.14991/001.19321001-0595 |
| Abstract | |
| Notes | 慶應義塾創立七十五年記念論文集 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19321001-0595 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

度迄是認せられる今日、述上の問題は其の重要性を特に大ならしめるものがあると考へる。

註一　Hilferding: Das Finanz Kapital, 邦譯　一四四頁。
註二　〃　〃　一六二頁。
註三　〃　〃　三四五頁。
註四　〃　〃　四六〇頁。
註五　〃　〃　四六〇頁。
註六　〃　〃　四六一頁。
註七　Das Kapital 高畠邦譯　第一卷二三章　六一五頁。
註八　〃　〃　〃　六二二頁。

# 經濟發展段階說の構造

## ——經濟史研究序說——

高村象平

## 一

「暴力を以てその自然の河床からそらされて居た水路が、障碍が失はれるや否や轟然としてもとの道にかへるやうに、いまや古を懷ふ滿足のまた喜びの太い吐息、優しい愛情の溫かなる鼓動はすべての人の胸を寬げまたそれに新たな生をあたへて、そこにあれほど長かつた合理主義の禁欲の後、いま古き宗教、古き民族また地方的風俗が抱きもどされた。そして彼等は再び古き家また城また寺院に歩み入り、そして古き唄を再びうたひ、古き傳說を再び夢見た」。あのロマンティシズムの時代、吾々がそれを耳にして直ちにハアマン、ヘルダア、シュライエルマッヒェル、シュレエゲル、或はノヴァリス、或はシェリング等を思ひ浮べるロマンティシズムの時代を、かくも美しくクロオチェは形容してゐる。そしてこの思想の一時期として考へられた限りのロマンティク期に於ける歷史叙述が、「粗强な二元論による啓蒙主義の思想に抵抗しようとして發展の概念を押したてた」と吾々に敎へる。もとより、この概念が全く新たなもの、この時代に初めて現はれたものであるといふのではない」けれど。(1)

まさに彼の語るが如く、この概念をロマンティク期以前に、或はルネサンスの哲學者達の汎神論の中に、或は骨

だけのようになつたと云はれる神學的見解の中に、これを追ひ求めることは出來るであらう。乍然それ等はいま私の問題とするところではない。「ロマンティク思想の最も豊富なまた有機的な豫感がヴィコの Scienza nouva（一七二五年）の中に見出される」(2)といふクロオチェの評言に從て、この期に先立ちて生れこの期の隆盛をみつゝある時に逝けるヴィコその人の思索の一端に觸れ、以て彼をしてロマンティク期の發展概念の代表的なるものを語らしめんと、私は先づ試みる。

（1）Benedetto Croce: Teoria e Storia della Storiografia. 3. ed. 1927. p. 243. e 246. 羽仁五郎譯、三四一―二頁、三四六―七頁。

（2）Croce: Op. cit. p. 248.邦譯、三四九頁。

伊太利の一角ナポリの人、ヂャムバティスタ・ヴィコの右の書は、その改訂再版（一七三〇年）が約一世紀の後ミシュレによつて佛譯されて、初めて人々の注意を集めたと云はれてゐる。(3)いま茲に私は、ヴィコに就いて、又はその書「新學問原理」に就いて詳述する要は無いであらう。私は、私の意圖に應ずる限りに於いて彼の言葉を引かう。彼の云ふ新學問とは如何なるものか。これに關説して彼は云つてゐる「事物が如何に成立してゐるかの仕方は、その事物の性質が如何なるものかを説明するものであり、かかる説明が學問の本來の課題である」と。(4)即ちそれは理論的歴史學とも稱すべきものと云はねばならない。そして「事物の性質は、一定の時の經過に於ける且つ一定の狀態の下におけるその成立に外ならない。何時でもこれ等がかくあれば事物はかく成立し決して異ることがないのである」(5)との命題を立てたことは、クレムの云ふが如く歴史的學問に原理を供するものと見てよいであらう。(6)ものの歴史性は、彼によつてかくの如く説かれてゐる。

ところでこの學問の對象たる「歴史的世界は、まさしく人間の作つたところである」。この「歴史的世界即ち諸國民の世界は、人間が創造したものなるが故に、人間がこれを認識することが出來るのである」。然も人間の性質は到る處に於いて同一であるとヴィコは云ふ。(7)　この命題に私は關心を持つ。それは他の機會（本誌本年五月號）に述べるところがあつたが、人間の歴史は人間の作つたものであるといふことの表現を、これに見出すが故である。この命題には、ヴィコの原理の中で注目すべきものの一つに屬するところの「同一性の原理」が横はつてゐる。彼に於いて諸國民はその地理上の又は人種上の差異に拘らず、同一な歴史的過程を辿るのである。そこに彼は社會發展の一般法則を定立してゐる。そして一國民の歴史は、更に高度の發展段階に到達した他國民の歴史の繰返しであると云ふ。乍然、この卓越せる見解も尚半神學的のそれであることは否めない。素、彼にとつて人間が歴史を作るのは、人間が神的な理性によつて豫じめ設定された計畫を遂行する限りに於いてである。(8)　この限りに於いてまさに私は彼と袂を分たねばならない。何となれば、私が人間が恣意を以て歴史を作るのでないと云つたことは、ヴィコの云ふところの豫じめ設定された神の計畫に從つて作るとの意味ではないのであるから。私のそれは、いはゞ「具體的人間によつて社會的に確立された計畫」に從ふの意味であつたのである。ヴィコの主張する諸國民の歴史的同一性は、これを探るべきであらう。然しそれは神的理性によつて豫じめ設定された計畫によるのではないことを斷らねばならない。

（3）それは Principes de la philosophie de l'histoire. Paris. 1827. であるとクロオチェは云ふ。(Croce: La Filosofia di Giambattista Vico. 1922. p. 336.) いまは、ミシュレの全集中の一卷 "Vico." の中に收められてゐる。―J. Michelet: Œuvres choisies de Vico. Paris. p. 281-642.

（4）Giambattista Vico: Die neue Wissenschaft über die gemeinschaftliche Natur der Völker. Nach der Ausgabe von 1744

übers. von E. Auerbach. S. 137.

(5) Vico: Op. cit. S. 81.

(6) Otto Klemm: G. B. Vico als Geschichtsphilosoph und Völkerpsycholog. 1906. S. 68.

(7) Vico: Op. cit. S. 135. u 139. このヴィコの言葉は歴史學の精髄を宣言せるものであるこ、アウエルバッハはその譯書の序言に述べてゐる。(S. 25.)

(8) Vico: Op. cit. S. 78.

ヴィコの歴史的對象の本質に關する他の注目すべき命題は、「人間の性質は一擊を以て變ずるものではない、それはつねに以前の段階の痕跡と最初の慣性とを留め置く」といふものこれである。この中に吾々は發展の繼續性が主張せられてゐることを看取り得るであらう。(9) 言葉を換へて云へば、それは連續的なる發展の主張である。そして言葉の上から見るならば、吾々が知つてゐるドロイゼンの歴史概念とヴィコの發展概念とは結びつく。即ち嘗て私が引用したところ（本誌本年一月號七六頁）によれば、前者のそれは「先件が後件の中に繼續され補充され擴大される連續である。それは復歸する圓の連續、反復する周期の連續ではなくして、無限の系列」であつたから。(10) 素よりこに私はヴィコよりドロイゼンに至る問題史的檢討を試みる心算はない。年然ドロイゼンがヘエゲルからの影響を受けることが多かつたといふロオタッカアの言葉を顧れば、(11) この問題史的試みは十分に可能性を持つ。とな何ればヘエゲルその人は、ヴィコがそれへの有機的な豫感をもつてゐたと云はれるところの、ロマンティク期に生存した一權威であつたのであるから。年然この問題は、いまはこれを措く。

(9) Klemm: Op. cit. S. 67. 8.

(10) Johann Gustav Droysen: Natur und Geschichte, in Grundriss der Historik. Neudrucke. 1925. S. 72. u 73.

(11) Droysen: Op. cit. Zur Einführung vom E. Rothacker. S. VIII.

發展の繼續性はまた、ヴィコの命題に見る如く、先行せる段階の跡をそれ自身の中に留めることが樞軸となる。從てこの發展のうちに保存性を持つといふことは、後なるものが先なるものに附け加へられること、換言すれば價値の增殖であり、それは改良的なる進歩を意味するとさへ云ふことが出來よう。彼の保有した發展概念の特徴の一つを形作くるところの、この保存性は、如何にして可能なのであるか。このことは先づ問はれねばならぬことの一つであらう。ヴィコは人間の現在の姿に就いて云ふ、「人間社會は、殘忍、貪欲、そして野心――この三つの惡德が全人類を紛糾せしめるのである――によつて戰術、商業、そして治國術、從てまた人間社會の權力、富、そして知慧を作り出す。この三つの大なる惡德は疑もなく地上の人間を破滅せしめるものであるが、然も尙これ等が市民の幸福な狀態を創造するのである。この原理は次のことを示す、即ちここに神の攝理が共働してゐるといふことを。人間の欲情（それはすべて人間の私利に依存し又その爲めに野獸の如く荒野の中に生活せしめられる）から、人間をして人間社會の中に生活することを可能とするところの市民的秩序を齎らすのは、神の叡智である」と。(12) 明かに彼はこの神の叡智によつて、神の攝理によつて諸の事物は統一せられ、この統一がまた發展の動因となると見たのであつた。この統一あつて、保存も改良も可能である。翼に見た如く人間のみが歴史を作るとヴィコは云ふ。然しその人間とは、彼にあつてはこの神の攝理を己がうちに藏する人間であつたのである。それは言葉を換へれば理性を有し、それによつて行動するところの人間の謂ひである。理性によつて人間は各〻統一され、このことは諸國民の歴史的同一性を生ぜしめる。時空に於いて相異せる諸國民の世界は、神的理念の統一に於いて觀察せられるのであつた。(13) 從て彼の云ふ人間の歴史とは、彼自らも云ふ如く永遠的理念的歴史でさへもあつたのである。云ふ、「吾々の學問は永遠的理念的歴史を敍述する。それは時に於いて過程するところの、その建設、進歩、狀態、沒落及び終

結を以ての、あらゆる諸民族の歴史である」と。(14)

(12) Vico: Op. cit. S. 77.

(13) Klemm: Op. cit. S. 33.

(14) Vico: Op. cit. S. 138-9.

彼の云ふ發展の動因が統一であることは右によつて明かであるが、更にこのことはその統一といふところからして看取り得るやうに、その發展が豫じめ設定された計畫に基くところの平穩なるそれであつた。それは何等矛盾によつて推進せしめらるるところなき發展であつた。それは必然的なる、そしてたゞそれのみによる發展であつたのである。彼は歴史發展の段階として様々なるものを、例へば神々の時代、英雄の時代、人間の時代を、或は貴族制、民主制、王制のそれ等を擧げたけれど、それ等はすべて必然的の、平和的の發展であつたのである。クロオチェはこれを評して云ふ、ヴィコは「歴史に於ける人間精神の發展を立てて、感覺、想像、次いで慧知として、また神的或は獸的時期、半神的英雄的時期、次いで人間的時期としての歴史發展を見ようとした。そして、人類の經來つた各の時期は、何れもそれぞれその力と美とを持つが故に、一つとして非とされるべきものはなく、その各はその先行の時代の必然の結果であり、又その後繼の時代の必然の準備であることを考へ、貴族制は民主制の爲めに、また民主制は王制の爲めに、各〻はそれぞれ正當なる瞬間にそしてその瞬間の正義として現れたことを示さうとした。」(15)

(15) Croce: Teoria. p. 248. 邦譯、三五〇頁。

彼の云ふ歴史發展が現實と遊離する結果に終るものであつたことは云ふまでもない。乍然これは又後述する如く彼の思索の特徴でもあつたのである。とは云へ尙彼が發展段階をうち立てて全體的に人間社會の發展を把握しようと試みたことに對しては、吾々は十分關心を持つべきであると思はれる。實のところ彼の見解をつきつめれば、人間が單なる道具として、即ち發展する爲めに理念が利用する單なる道具としてしか價しないものであつたとも云ふことが出來るであらう。それと同時に彼の發展段階説は、クロオチェも云つてゐるやうに、「東方的又古代的な循環の動機（往及び復）を再興し、往を發展又生成として理解し、復をディアレクティク的復歸として理解した」(16)ものとも做すことが出來よう。それは古代的な循環的理論の殘滓の存在である。然も尙それと共に彼は、發展の動因が統一であることからして、當然、その發展の最高の段階が終局的のそれであることも云はんとしたのであつた。彼の原始への思慕はこれを表はす。

(16) Croce: Teoria. p. 262. 邦譯三七三頁

歴史全體が必然的發展として理解されるに至つたのは、まことにロマンティク期に於いてであつた。この契機をなしたところの發展概念の主張者たるヴィコの先驅的意義は、十分これを買ふべきであると考へられる。勿論彼自身は謂ゆる啓蒙主義期にあり、またその主張は、いち早く伊太利に發展しつゝあつた新興市民社會の要求に應ずるものに外ならなかつたとしても。

## 二

クロオチェによつて心ゆくまで形容された「ロマンティク期に於いては、この發展の概念は最早ひとりのさびしい又聽衆も持たぬ哲學者の思想であるだけではなくして、それは一般の確信にまでひろがつた。それは最早そつと

暗示されて又は矛盾的に主張されて現はれたのではなく、まさしくその體驅とその關聯とその力とその優勢とを備へた。ヘエゲルの體系の中にその頂點を示した理想主義哲學の原理概念もこの發展の概念である。」(1)

（1）Croce: Op. cit. p. 248. 邦譯、三五〇頁。

吾々が、ところで、曩に掲げたクロオチェの形容に立ち戻るならば、このロマンティシズムが、回顧的、美的觀賞の態度をその奥底に確く抱きしめてゐるものであることは、容易に看取ることが出來るであらう。過去への思慕、それは云ふまでもなく回顧的として言ひ現はされる。ディルタイはこのヂェネレエションを制約した條件の一つ、そして最も重要な條件を、「純粹に消極的な性質のもの、即ち生そのものから發すべき一切の强力な衝動の缺如」に求めてゐる。(2) そのことは亦及んで、この時期の一般の確信にまで擴がつた發展の概念も、尙等しく消極的な性質のものであつたことを吾々に教へる。あの回顧的な、古を懷ふ思慕に滿ちた、そして又すべての人々が小さなグループに分裂してゐたこの時期、その時に當つてかかる狀態が如何に感じられ意識的に如何に受け容れられたかは、發展の概念の樣相によつて吾々に十分に示されるのである。

云ふ迄もなく回顧的なる態度は觀想的なるそれであるといはれよう。從て回顧的なるこの時期に於いて、すべてのものに對すると同じく、人々がその有する發展概念さへも觀想的なるものを出でなかつたことは考ふるに難くない。この觀想的なる――それは靜觀的と云つてもよいであらう――發展概念、その特徴については、吾々は多くの道しるべを持つ。然しここでは既に語り來つたヴィコのそれが、諸特徴の一部分を示すと云つて置かう。勿論彼はこの時期の人ではないであらう。然し「ロマンティク思想の最も豐富なまた有機的な豫感」を藏せる思索家として、

彼の語る發展概念を以てロマンティク期のそれを類推することは、さまで非難せらるべきものではないと考へられる。

（2）Wilhelm Dilthey: Das Erlebnis und die Dichtung. 7. Aufl. 1921. S. 291.

通常、ロマンティクは卒直に生命を把握する世界觀であると做されてゐる。(3) それは「全體の有機的生命」を、合理的にではなく、生命それ自らに於いて把握せんとするのである。そこに行はれたのは、「純粹に抽象的な生命把握ではなくして形上學的なるもの。機械的そして原子論的な思惟ではなくして統一と孤獨とへの努力」であつた。(4) 機械的、原子論的に發展を見ずして、全體的、有機的の發展の中に、生命を把えんとするの努力であつた。從てその發展は終り無き過程ではないといふ性格を有する。それは全體的完結への過程である。いはゞ現在が全體的有機的完結である。素よりそれは思念せられたものである。それは統一の概念からしても生じ來る傾向であらう。それ故にロマンティシズムは過去の記憶に結びつく。古きものへの思慕に生きるのである。それは觀想的態度よりしての當然の歸結と云はねばならないであらう。觀想的なる態度からして出でた消極性、それに對應して、美的觀賞の態度から吾々は何を見出すか。それは直ちに知らるるが如く、個性の尊重である。言葉を換へて云へば、美的探賞は個性の尊重に連なる。このことは吾々が、吾々の周圍に於いて日常に容易に見るところであらう。この立場から歴史に就いて云へば、過去の個性がとり出される。或は、過去からの過程に於ける個性の摘出が、前者と相俟つてその中心となる。

（3）Vgl. Jakob Baxa: Einführung in die romantische Staatswissenschaft. 1923.

（4）Baxa: Op. cit. S. 7.

かくの如き地盤の上に約半世紀の後、獨逸に於いて打ち立てられたものとして吾々は歴史學派を持つ。素よりこ

の後者は、前者ロマンティクに屬するフィヒテの「商業國」からアダム・ミュウラアを經てのフリイドリッヒ・リストに至る影響の存續によつて作りあげられたそれぞれの階梯を持つと、思想史的に見ることも出來よう。(5)しかのみならず、リストは、過去の陶醉に生きるところのロマンティシズムの地盤に立つとは云へ、ロマンティクとは異り、冷やかな實證主義をたづさへてであつたとも云はれよう。又モムベルトも云ふが如く、獨逸に於ける歴史學派の本來的建設者はロッシャアとすべきであつて(6)、リストはこれに至る一の先驅者たる地位を與へらるべきであらう。更にこの歴史學派が前人の思想的遺産の上に、尙それ等とは異るところある思想的武器を帶びて立ち上つたものであるとのみ見ることは、勿論出來ない。古典學派の「世界主義」と「永遠主義」とに對する反動として、又獨逸が後進國たる爲めのこの國の保護關税運動が搖籃となつて、歴史學派が生れたとは吾々の知るところである。(7)然も尙、この學派は、その成立の地盤を、獨逸ロマンティクに於いて持つ。

云ふまでもなくこの歴史學派は、抽象的理論に對する否定的態度、法則の概念に對する懷疑的な態度、普遍化を拒否する狹量な經驗主義、更には具體的・歴史的な材料の蒐集の要求等をその特徴とする。(8)謂ゆる舊歴史學派と新歴史學派とを問はず、それ等に共通するところは、一般的法則を導き出すことを輕んじて個性記述的の純記述を、經濟學の、否、歴史的社會的學問の目的としたことである。この個性尊重の立場は、この學派がロマンティシズムの地盤の上にあることを、この點からのみ見ても吾々に承服せしめる。そしてシュモラア自ら云ふ如く、事實の廣汎な蒐集から、種々の時代、民族、及び經濟狀態の特殊研究を必要とし、且これに進んだことは、この學派が過去の歴史に愛着を有し、回顧的な觀賞的な態度を、ロマンティシズムから受けついだことを示すものに外ならない。ではその發展の概念は如何であつたか。等しく吾々が曩にヴィコに於いて見た如き性格のものであつたか。私はこと

にこの學派の發展の思想を明瞭に敎へるものとして、人々がこの學派の名前と共に直ちに聯想するところの經濟發展段階説を採り上げようと思ふ。

(5) Baxa: Op. cit. S. 79.

(6) Paul Mombert: Geschichte der Nationalökonomie. 1927. S. 466.

(7) N. Bucharin: Die politische Ökonomie des Rentners. 2. Aufl. S. 14-5. Vgl. Mombert: Op. cit. S. 456.

(8) Bucharin: Op. cit. S. 16.

素より發展説と發展段階説とは同一視せらるべきものではないであらう。前者はいはゞ無段階的發展説、即ち單なる發展説である。これにあつては發展は、推移とも呼ばるべきものに等しい。謂ゆる直線的發展はこの前者の一面である。平面的發展はこれの他の半面である。これに反して後者の段階的發展説は、その發展する段階の各、がいづれも、少くともその段階に關する限りは、全體的に捕捉せられ觀察されることを性格に持つ。その各段階は統一せられてゐる。それは單なる直線的の發展ではなくして、いはゞ層をなして發展する。勿論この後者自體に於いては、一の段階から他の段階への轉化が平穩裡に遂行せられるか否かが問題となるであらう。然しこの問題は、段階説と單なる發展説とを區別する限りに於いては必要ではないと考へられる。ところでヴィコの發展説は單なる發展説に過ぎなかつたか。この問に對して吾々は否定を以て答へる。その發展説は段階的發展説であり、それはまたロマンティク期を特徴づける有機的全體觀の先驅的な現れであつたのである。ここに於いて私がこの稿で取扱はんとする問題は一つの限定を得た。即ち單なる歴史發展説ではなくして、歴史發展段階説を中心として筆を進むべきことこれである。

## 三

發展段階説は、斷るまでもなく歴史學派の獨占するところでもなければ、またその獨創に出づるところでもない。古代に於いてはツキディデス、プラトン、アリストテレス、下つてはボオダン、モンテスキュウ、ケネイ、スミス等等が、いづれも各自の立場からして説くところであり、歴史學派を經てその沒落後に於いても數多くの段階説が立てられてゐる。(1)私はこれ等の各をここにとりあげる心算もないし、又、歴史學派に屬する諸學者の多くの段階説をいちいち批判することもしない。たゞ私が意圖するところは、この歴史學派の段階説の本質を把捉することである。ロッシャア、クニイス、ヒルデブラント、ビュッヒャア、シュモラア、これ等歴史學派の代表的學者の説く經濟發展段階説が、その各〻の外形はすべて異つてゐるけれど、尚それ等が共通に持つところの性格を捕ふることを、私はここに企てる。

(1) Vgl. Hans Proesler: Die Epochen der deutschen Wirtschaftsentwicklung. 1927. S. 8-55.

既に一言せる如く、リストその人を歴史學派中に包容せしむる可否は問題とされるところであるが、通例、經濟發展段階説の説明にあたつて最初に擧げられるのは、彼の名前である。彼の段階説は生産形態を標準とし、諸國民は野蠻、遊牧、農業、農工業、農工商業狀態の主要五段階をとるとなすものであり、そして彼が理論家たらずして經濟政策家たること、この説が各〻の國と時代との經濟發達狀態に應じて適當なる商業政策を立つべきことを云はんとしての主張であつたことは、これ亦吾々の知るところである。このことからして一部推測し得るやうに、この五段階説は、單に實證的に經濟生活發達の動向を指示するものに止まらなかつた。それはその内容としてこれと異る色彩のものを含んでゐるのであつた。即ち彼れの説には、彼の見解よりしての理想狀態に漸次に近づく段階が説かれてゐるのである。例へば「單なる農業國は農工業國に比して完全ならざる狀態である」(2)と云へることは、その證左であるとされる。後の段階は前段階に比して一層完全なものである。それは理想狀態へ、完成への發展段階説とも云はるべきもの、理想主義的香氣高きものと云はねばならない。從て彼の段階説は形式と内容とに於いて相反する二つのものを持つのである。彼が實證主義者であつたといふことは、彼の段階説の形式の上から、即ち經濟生活の發展過程の推移を指示するところから見た彼の半面的性格であつた。然しその説の内容から云ふならば、理想狀態の主張を見る。そしてこの觀念的な本質が實證的な裝ひを以て飾られてゐたもの、それが、彼の段階説であつたのである。

實證的といふことが歴史學派全體を通じての特色であつたといふ通説に從ふならば、かくして、それは彼の段階説の表面のみに見るところであると云はねばならない。現象は本質を顯にしてゐるものでなく、寧ろその反對であるといふことを吾々は聞かされてゐる。その一例としてリストの段階説は擧げらるべき性格を帶びてゐる。このことからして彼は尚過去の地盤の影響から脱して居らず、從て謂ゆる歴史學派のうちに數へらるべきものでないことを示すと云はねばならないであらう。では、通念に從つての歴史學派代表者の段階説から共通にひき出されるものは、リストの段階説の外衣に吾々がいま見たもののみであつたらうか。

(2) Mombert: Op. cit. S. 459.

謂ゆる生産の三要素の共働の程度を標準として自然、勞働、資本の各〻が優勢なるところのそれぞれの三段階を立てたロッシャア、交換手段の推移を以て自然經濟、貨幣經濟、信用經濟の順序を持つヒルデブラントの段階説、財が生産者から消費者に至る徑路の長さを標準とした封鎖的家内經濟、都市經濟、國民經濟のビュッヒャアの段階説、

或は經濟生活の發達が政治的領域範圍の擴大と密接なる關係ありとして村落經濟、都市經濟、領域經濟、國民經濟、世界經濟の發展段階説を唱えたシュモラア等は、いま改めて述ぶるまでもない周知のことに屬する。そしてこれ等に對して從來行はれた非難の數々を顧みても、これ等の段階説がすべての國に適用され得ぬものであるとするもの、或は段階の各〻に於ける特性が不完全にしか表現せられてゐないとするもの、或は段階の立て方が歴史的事實と適合してゐないといふもの等は、すべてこれ亦吾々の屢〻耳にするところである。例へばベロオが總括的に經濟發展段階説一般に對して次の如き批評を加へてゐるものはその代表的なるものであらう。曰く、「諸民族の經濟發展理論のすべてに對して、ヒルデブラントがリストに對して加へたところの、即ちそれ等の理論は單に一又は二三の民族の歴史或はそれ等の歴史の個々の部分から抽象されたものに過ぎないといふ、反對が一樣に加へられる。例へばシュモラアの理論の基礎は、大體單に獨逸民族の運命から構成されたに過ぎない。ビュッヒャアは既に彼の理論は寧少くとも中央及び西ヨオロッパの諸民族に對して『妥當するといつて限定してゐる。然しひとがかかる承認を餘儀なくされるならば、それによつてこの理論の普遍妥當性を斷念するものである」と。(3)

ここにこの學派の惱みが介在する。即ちそれは永遠的な絶對法則を否定し去つて起ち上つたこの學派と雖も經濟學が學問として成立すべきものたる以上、何等かの法則の概念を採用せざるを得ず、そしてそれは歴史的、統計的研究の助けを借りて定立した經驗法則に止まらしめ、以てこの學派獨自の境地を開拓せんと心掛けながらも、尚勢の趨くところ偶々その法則(發展段階説)に普遍的性格を賦與することを口走らざるを得なかつた惱みである。歴史學派の包藏する自己矛盾の現れの一つであると、ひとはこれを目して云ふ。これに對して、段階説が抽象的であるとの非難ありとは云へ尚それは實證的立場を失つての法則化なのではないといふ辯明が、この學派に屬する人より發せられて居る。年然こゝとはこの辯明によつて氷解せらるるものであつたらうか。否、辯解は結局辯解たるに過ぎなかつたのである。その理由としては種々のものが擧げられ得るであらう。法則概念の究明よりして、實證主義の解剖よりして、或は經濟學の構造の吟味よりして等。然し私はその理由付けを發展の問題からして導き出したいと思ふ。

(3) Georg. von Below: Über Theorien der wirtschaftlichen Entwicklung der Völker, mit besonderer Rücksicht auf die Stadtwirtschaft des deutschen Mittelalters, in Probleme der Wirtschaftsgeschichte. 2. Aufl. 1926. S. 164-5.

リストに於ける段階説の形式的性格、そしてロッシャア以後の諸説の性格の全幅に就いては、樣々の言葉を以て言ひ現はされるであらうが、それ等は畢竟歴史學派自體の性格たる、經濟現象の有機的統一の主張から派生し來るものに外ならない。從てその採るところの發展概念は、有機的のそれであつたと云ふことが出來よう。然もそれは機械論的古典學派への反動、更には歴史學派本來の地盤の强き影響の然らしめるところであつたのである。後者に就いて繰り返へして云へば、ロマンティクの性格は歴史學派の脱する能はざるものであつたのである。そこには、吾々が曩にヴィコに就いて見た如き、神學的色彩は無い。又ヴィコに殘存せる古代的循環理論の名殘りも存しない。即ちヴィコの藏せる古代的中世的殘滓は見出し難いが、その他の點に就いては等しく有機的發展として性格づけらるべきものが、歴史學派の段階説の眞髓であつたと考へられる。即ち同一地盤にあつて結局歴史學派はヴィコ的性格を、右の限定を持つて、保有すると見てよいであらう。一言にして云へばそれは觀想的性格を持し、過去からの過程のみが採り上げられ、然もそれは現在に於いて完結せられると見るのであつた。即ちロッシャアの資本要素の優勢なる時代、ヒルデブラントの信用經濟時代、ビュッヒャアの國民經濟時代、シュモラアの世界經濟の時代のそれぞれは、

最後の、最高の發展段階であつたのである。そして同一なる有機體がこれ等の段階に到達する成長過程を説くのが、その發展段階説なのであつた。過去の諸段階は、最後の段階に對する段階と看做すものであつた。よく比喩されるところであるが、過去の歴史を以て子供が次第に大人に成長する如き過程と見るところに、この歴史學派の發展説の共通的性格があると云つてもよいであらう。現在までの歴史はたゞ現在を作り出す爲めの手段と看做される。現在の段階、この最後の段階が過去の歴史的發展の目的であると考察される。かかる觀點を、歴史學派の諸段階説は共通に持つてゐたのである。

例へばビュッヒャアがその國民經濟なる段階に就て次の如く語るを聞け。曰く、「一民族全體の欲望充足が惹起するところの、施設、設備、所爲の總體が國民經濟を構成する。國民經濟は更に多數の個別經濟に分たれるが、後者は交換によつて相互に結合され、そしてそれ等の各〻が他のすべてのものに對して或る任務を負ひ、又他のすべてからかかる任務を負はされてゐるといふことによつて、相互に對して多種多樣に依存し合ふのである。あらゆる方面に對して相互關係に立つ狀態から云つて、國民經濟は、吾々の背後に横はれる總體の文化發展の結果である。」「歴史的・文化的事實を完全に理解するには、それが如何にして生成して在る(geworden sein)のかをひとが知る時、(4)初めて達せられるのであるが、そのやうに吾々はまた、次の如き課題を閑却するを許されないのである。即ち諸文化民族の經濟が今日の國民經濟の形姿をとる前に、如何なる發展段階(ファアゼ)を經て來たか、そしてその際各個の經濟現象は如何なる變遷を經驗したかを研究することである。」「遠き過去の時期に於ける一民族の經濟を理解せんと欲する經濟學者が提起すべき第一の問題は、次の如きものであらう。その經濟は國民經濟であるか？　この經濟の諸現象は今日の吾々の交換經濟のそれと同一性質のものであるか、或は兩者は互に本質上異るものであるか？」と。(5)まさに、今日の國民經濟は最後のそして最高の發展段階であると、ビュッヒャアは云ふのである。過去の歴史は一切今日の國民經濟を作り出す手段に外ならなかつた。今日の國民經濟は過去の歴史的發展の究極目的である。

(4)　現在を以てかくの如く geworden sein と見ることに就いては尚他に論ずる機會を持ちたいと思ふ。

(5)　Karl Bücher: Die Entstehung der Volkswirtschaft. 17. Aufl. 1926. I. S. 85. u. 86.

かゝる見解は、ひとりビュッヒャアに止まらなかつた。それは歴史學派に屬するとせらるる他の諸學者の段階説が、等しく共通に帶びるところであつたのである。して見れば、ここにそれ等謂ゆる歴史學派本來の諸段階説も、蓑に見たリストの説とはさして背馳しないものを持つと云はねばならない。リストと云ひ、ビュッヒャアと云ひ、ヒルデブラントと云ひ(等等)、それ等は共通に歴史學派段階説として性格付けらるべき同質のものを包藏するのである。それは蓑に私がリストに於いて區別したところの、形式上に於いても、また内容に於いても。たゞ内容に於いて、リストに於けるが如き濃厚なる觀念的理想主義的色彩は、歴史學派本來の諸説に於いてはこれを見ることが出來ないであらう。然しその歸するところは同一であつたと云つても暴言ではないと思はれる。それは結局程度の問題であつたのである。そしてこの性格はまた再三述べた如く、彼等の地盤たるロマンティシズムに絡はるところのものであつた。それは有機的發展説のしからしめるところであつたのである。この意味に於いて、ヴィコは歴史學派と問題史的關聯を持つ。

## 四

かくの如く性格付けられた歴史學派の發展段階説は、如何にして構成せられるのであるか。私はここにその構造

を探ねて、再びこれをビュッヒャアに聞く。

彼は云ふ、「經濟段階の定立は缺くべからざる研究方法的補助手段に屬する。それは經濟理論が經濟史の研究結果を利用し得る唯一の方途である。然しその發展段階は、歴史家がその素材を分類してゐる時代別と混同すべきでない。歴史家は一「時代」に起つた重要な事を物語ることを忘れてはならないが、これに反して理論家の段階はたゞ正常的なことを表示するを要するのみであつて、偶然的なことはこれを大膽に無視してよいのである。一切の經濟的諸現象と諸設備とを基礎に持つところの、緩漫な幾百年以上にも亘る變遷に際して、一の場所では發展が迅速に行はれ、他の場所では後れてゐることは決して稀ではないのであつて、かかる非正常的諸現象は歴史家にとつて特に重要なものとなり得る。然し理論家にとつては、總體の發展をその主要段階（ファアセ）に於いて捕捉することのみが行はれるのであり、これに反して、一切の諸現象がその流れの中に在るところの謂ゆる過渡期はこれを顧みる要がないのである。彼はたゞ發展狀態のみを取扱ふ。或は、彼は發展の法則を見出すのである。」(1)

(1) Bücher: Op. cit. S. 87-8.

このビュッヒャアの言葉は當然歴史家ベロオの反駁するところとなつて居る。即ちベロオは右のビュッヒャアの主張に應答して、「多くの經濟學者が歴史的素材に對してかかる自由な關係を自ら許し――現在が供給する材料に就いて、同樣な專制君主的方法で處理せねばならなかつたことを、私は怪む。ひとが純粹論理的範疇を構成し得ることは、私もよく知つてゐる。然し縱令確實ならずとも、ひとが或る年代的關係に於いて考へるところの段階は、本質上『論理的性質』を持たないものである。經濟學者が經濟理論と經濟史とを如何に分たうとも、吾々歴史家は彼（ビュッヒャア）が歴史的判斷の形で述べるところのものを問題とする。」(2)

ベロオその人も發展段階説の定立を否定するものではない。但しそれが普遍妥當的發展法則でないことに注意を拂ふべきことを要求したことは、既に吾々が見たところであつた。彼がビュッヒャアに對して反對するところは、ビュッヒャアが一の直線的發展を信じそして個々の歴史的現象を可能なる限り彼の發展圖式に押し入れたことを以て敍述上の缺點なりとすること(3)、更にビュッヒャアが「正常的なるもの」のみをその對象とすることを排斥し、彼が尙理論と歴史とを混同してゐるといふこと等である。素よりベロオの反駁は、幾多の史實を擧げて迫るものであるが、それ等に立ち入つていちいちこれを見ることは、いまは必要としないところである。

(2) Below: Op. cit. S. 172.

(3) Below: Op. cit. S. 185.

段階説の構成に就いて、經濟學者ビュッヒャアと歴史家ベロオとはその見解を異にする。ビュッヒャアのそれは云ふ迄もなく、歴史學派一般の包藏する自己矛盾をそのうちに有するものである。これに對してのベロオの批判は大體に於いて正しいと考へられよう。乍然そのことの深き理解の爲めには、ベロオ自身が有してゐた發展段階説一般に對する見解が明かにされてゐなければならないのは素よりである。ここに於いて、私は彼自身の言葉を以てこれを知るべく努めたいと思ふ。「歴史的に重要なもの、本質的なものは、共通的なもの、合律的なもの、正常的なものとして、種々なる歴史的現象から現はれるところのものと決して同一ではない。單に後者に對する關心のみを以ては、ひとが歴史の生命力を認識せんと欲してもこれを得ないのである。變則も規則と同樣に興味あり或は少くとも重要である。正常的なるものとして引き出された事實を一面的に顧みることによつて得られた發展系列は、却つて論爭を生ずるが、歴史的生命の極意には殆ど導くことがないものである。歴史家は、彼が『到る處に（あらゆる諸民

族に於いて）同様に經過する發展過程の」假定、到る處に經濟生活に於いて束縛から自由への繼續的發展が行はれるといふ假定、を否定する時にも、決して懷疑論者の立場を採らない。彼はかかる假定が、單に證明し得ないのみならず、却つて公平な歷史的研究によつて否認せらるが故に、これを否定するのである。史料は、一切の歷史的叙述の基礎でなければならない、歷史的概念にとつても、亦無味乾燥なる個々の事實にとつても。」(4)

史料がベロオに於いては最高の審判官である。この見解を以てして、發展段階說と如何に結び付くかを見なければならない。云ふ「眞の學問の最高の標識が、總括的判斷の、全般的に適應する且つ精密なる表明なる場合には、歷史家は、諸事實を注意深く且つ能ふ限り完全に確定し、因果關係に結びつけ、超個別的觀念の下に秩序付け、對象の價値を評定することに、彼の職分を見るのである。彼は諸事實の觀察から作りあげる。然し作り上げるといふことが全く彼の目的なのである。この仕事にとつては亦、段階概念の利用が彼に好都合な補助手段である。勿論これに就いては、それを正しく使用すること、それが實際何であり何を與へ得るかを明かにすることが肝要である。」(5)

それは如何にして使用されるのであるか。ベロオはこれに答へて、「ひとが種々の段階を、それに一定時に於ける一民族の狀態を適合せしめ得る如き理念型として觀るならば、使用することが出來る」と云ふ。(6) 次いでマクス・ヴェバアの理念型的概念の特質を述べたる後、「當然この理念型は確實に獲得された歷史的觀察材料の上に打ち立てられなければならない。事實上過去の狀態が如何にあつたかといふことに無關心な範式の構成ほど强く排斥さるべきものは無い」(7)と云ふ。簡單に云へば、素材のみ取扱ふべからず、また概念のみ取扱ふべからず、この注意の上に使用するならば、段階說は研究上多大なる效果を齎らすところの手段であるといふのが、ベロオの見解であつた。

(4) Below: Op. cit. S. 189-190.

(5) Below: Op. cit. S. 190.

(6) Below: Op. cit. S. 191.

(7) Below: Op. cit. S. 192.

この最後の引用文に見る如く、歷史家ベロオは歷史家たるに止まる限り、なほランケ的色彩を持つ。あのランケの有名な言葉 wie es eigentlich gewesen ist.(8) を想起せよ。實證主義的歷史叙述の使徒ランケ(9)の影響は、歷史家ベロオの身邊に絡はる。素よりベロオはランケの下位に甘んずるものではなかつたけれど。ヘエゲル哲學に對し、ロマンティシズムに對して敢然戰を宣したランケの態度は、ベロオがロマンティシズムの地盤を有する歷史學派に對して批判を加へた態度と、一貫相通ずるところがあると見られよう。そしてロマンティシズムが國民的傾向を持つことに對して實證主義はこれを排斥したが、それと同じく歷史學派に對するベロオの態度も、前者の國民的また實踐的傾向性は禁ぜられ事實の記載を變へることは全く許されないところとしたのである。言葉を換へてそして極端に云へば、ロマンティシズムと實證主義との禍的な歷史學派の段階說は、實證主義を振り翳してのベロオの排擊するところとなつたのである。乍然、近代の實證主義がロマンティシズムと果敢に戰つたにも拘らず、尙有機體說を全く克服し得なかつたことは、ひとの知るところである。この戰の結果はそのまゝベロオに當て嵌めることが出來よう。しかのみならず、ベロオは尙、理念型として、十分史實をとり入れた理念型として、段階說を採用すべきこと、然もそれが決して無用の空論ならざることを說いた。それは結局ベロオにあつてはヴェバアに於けると等しく、目的ではないが手段、「歷史叙述に一義的表現手段を與へんとするもの」(10)であつた。然も吾々がヴェバアに於いて見る如く、「理念型は一或は、二三の觀點の一面的高昇によつて、その觀點に關係するところの散在せる、此處には

多く彼處には少く時には全然存在せざる個別的現象を、それ自體一つの統一せる思惟形像にまで、まとめあげることによつて得られるものであり、その概念的純粋さに於いて、かかる思惟形像は何處にも現實に於いて經驗的に見出されるものでなく、そは一のウトピイである。」(11) 勿論前述の如くベロオの採る段階説の性格たる理念型は、確かにかくの如きヴェバア本來のそれとは異なる。然も尚かかる觀念的産物を、縱令それが純然たるものでなくても、手段として採用することを云つたが爲め、この「假借なき批評家」ベロオも、徹頭徹尾實證的なる歴史家アルフォンス・ドプシュの論難するところとなつたのである。(12)

(8) Vgl. Eduard Fueter: Geschichte der neueren Historiographie. 2. Aufl. 1925. S. 484.

(9) ヨオクは、ランケを目して美學者であると云つてゐる。それはランケの藝術的表現から云つたのであるが、この解釋は、歴史學が個性記述的の學問であるといふ點からして生ずる審美的見解の問題に連なるものである。そしてここに物語的歴史の性質を帶びる契機がある。然もこれは結局、有機的發展の思想を把持するが爲めであると見られる。Vgl. Briefwechsel zwischen Wilhelm Diethey und dem Grafen Paul Yorck v. Wartenbug. 1877-1897. 1923. S. 59 60.

(10) Max Weber: Die Objektivität sozialwissenschaftlicher und sozialpolitischer Erkenntnis. in Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre. 1922. S. 191.

(11) Weber: Op. cit. S. 191.

(12) ドプシュに就ては、嘗て私は本誌（昨年五月號）に於いて紹介したことがあるので、ここに彼の立論に深く立入ることは差控へたいと思ふ。彼の書に對する批判として、ヘックシェルの Natural-und Geldwirtschaft in der Geschichte. in Vierteljahrschrift für Sozial-und Wirtschaftsgeschichte. B.I. 23. (1930) 及び Natural and Money Economy. in Journal of Economic and Business History. Vol. III. (1930.) は注目すべき論點を含んでゐる。

ベロオの峻嚴さを以てしても、尚段階説自體に對する解剖がなされたとは看做し難いであらう。如何にも段階説を理念型として認むべきことを説いて、ベロオは一先づ歴史學派の主張を論駁しきつたものの如くである。然し、少くとも理念型として段階説を認むるとならば、彼の最も非難の的となつたビュッヒャアの段階説さへも、「理念型として解せらるべく又辯護せらるべきもの」(13) となつて終るのではないであらうか。この意味に於いて彼の批判は眞に突き進んだものとなし難いやうに思はれる。乍然私が斯く云ふのは、ドプシュの意味に於ける段階説否定論を奉じての上のことではないのである。ドプシュの否定論は、自然經濟と貨幣經濟とが世界史上並存することを擧證してその結果「經濟段階説は史實と一致するものでなく、またその進化的構造にあつては全く支持すべからざるものであり、それは個々の國及び時代に於ける、甚だ多樣にして且つ極めて相異れる發展を、何等根據なく單純化するものに外ならない」として(14)、これを一般に否認し去るものである。勿論このドプシュの言葉自身の中には耳を傾くべき分子を含むのであるが、然も尚彼に於いてもその批判は、ベロオのそれと同じく致命的缺陷を有するものと考へられる。理念型として採るべき修正説を掲げたベロオも、理念型としてさへ採るべからざる否定論を唱へるドプシュも、いづれも等しく眞の批判を加へたとはなし難いのである。ビュッヒャアが、彼に先行するリスト、ヒルデブラントの段階説を目して、「それ等は事物の本質に透徹することなく、寧ろ皮相に固執するの不都合を犯してゐるものである」(15) と云つたことは、そのまゝ彼に返上せられるのみならず、彼の批判者ベロオにも、その亦批判者ドプシュにも當て嵌る言葉の如く考へられる。

何故であるか。私はこれを求めて、從來の段階説の骨子たる有機的發展觀に言及するところ無きことにこれを得る。ベロオはこれを看過した。ドプシュも史實に沒頭するの熱心なるあまり、この點にまで立ち歸つて以て、彼の否

定論を權威あるものたらしめるに至らなかつた。從て彼等の批判は「皮相に停滯する」ことになり終つたのである。有機的發展といふ從來の段階説の中樞を批判して、初めて段階説は眞に批判せられ、從てまたその構造も明かにせられ得るのである。

(13) Robert Wilbrandt: Geschichte der Volkswirtschaft. 2. Aufl. 1931. S. 25.
(14) Alfons Dopsch: Naturalwirtschaft und Geldwirtschaft in der Weltgeschichte. 1930. S. 261.
(15) Bücher: Op. cit. S. 88.

## 五

ビュッヒャアも云ふが如く、發展段階は時代區分と異る。その言葉を聞いてあの吾々の誰もが直ちに想起するところの歴史に於ける時分區分、即ち古代・中世・近世のそれの如きと、發展段階とは同一視せらるべきではない。前者はルネサンス期に於いて「人が中世時期の概念をば、それが一つの全體をなして、古代と新・古代とより成る一つの全體に對立するかのように、否この二つの時期の中間に挿入された一つの惱ましい痛ましい楔を示すかのように考へた」ものの、遺物であるとは、クロオチェが吾々に教へるところである。(1)「最もあかるく輝いた光明」、それが古代であり、近世はそれへの復興期である。そして「ふかい暗黑」、それが前二者の中間にある中世であると觀て區分したこの時代區分は、その他樣々の史觀に立脚しての時代區分と共に、歴史を、連續的成長を遂ぐる一つの有機的全體とする共通的な性格を帶びる。然も尙この時代區分と峻別した從來の段階説も、その各段階は「原始及び古代から現在の文化高度に至る發展の直線的上昇に於いての經濟的時間序列として把捉」(2)するに過ぎなかつた。ここにその致命的缺陷が潜むのである。(3)

既に見たところであるが、從來の段階説の特徴としてそれ等が最後に掲ぐる今日の段階は最高且つ完結的のそれと做す。過去の諸段階は今日の段階に到達する爲めのものとのみ見るのであつた。然し發展が對立物の統一、内在的矛盾を通じての運動の現はれである以上、今日の段階は過渡であり終結的ではない。それは從來の段階説がその過去の段階に見たところと等しく、發展の過程にあるものである。從てこの點からして從來の段階説は、發展を見ない發展段階説に外ならぬと云ふことが出來るであらう。それはまさに致命的缺陷の一つである。

更に從來の段階説はいはゞ平和的發展に於ける段階的變化とも云ふべきものを採り上げるに過ぎないものであつた。そこには急速な變化に非ずして緩漫な變化が、飛躍に非ずして成長が、段階の中絶に非ずして連續的段階が含まれてゐる。即ちすべてのものが既に眼に見えぬ微細な形で存在して居り、それが徐々に成長すると見る平坦な過程を、單に表面的に段階付けるものに外ならなかつたと云ふことが出來よう。それは極端に云へば「進化」の表象に外ならない。この進化の單なる段階付けによつて、複雜な道をとつて行はれるところの歴史的發展は、明かにされ得たか。その成否は既に從來の段階説によつて自ら物語られてゐるところである。社會の發展過程は平坦なる道を行くそれではない。それは單なる連續ではない。勿論發展であるからには連續性は見られるであらう。然しそれは連續に於ける非連續並びに非連續に於ける連續の過程であると云はねばならぬ。簡單に云へば飛躍を通じて發展は行はれる。緩漫な段階的變化の成長がすべてなのではない。先行するものが後なるものに含まれ保存されて行く許りでなく、段階の中絶が、飛躍が行はれるのである。乍然この社會の發展過程は、從來の段階説を以てしては理解され得ぬところであつた。その所以は、結局社會的發展の基礎に就いての無理解、歴史の推進力の無省察に求める

ことが出來る。吾々は、物的生産が社會生活の基礎であり、前者の發展が社會的發展の基礎であることに就いて、いまさら說く要はないであらう。然しこの根本事實は、從來の段階說に於いて、何等顧みられるところがなかつたのである。

（1）Croce: Teoria. p. 218. 邦譯　三〇一頁。
（2）Dopsch: Op. cit. S. IX.
（3）勿論かく云つたところで、これ等の諸說が、嘗てはそれぞれの時代のそれぞれの社會に於いて、唱へらるべき理由を具備して存在したものであることを無視するものではない。それ等はいづれも各々の社會の一定の構造に應ずるものであつたことは勿論である。

以上の如き無反省は、從來の段階說に於いて、各段階を區別する標準に、いづれも根源的ならざる樣々のものを持ち來らしめた。如何なるものが擧げられたかは旣に一言したところである。(4) その結果は、それ等が生ひ立つた地盤自體に內在する標徵と混交したところの明白なる不備を、吾々に示す。そしてそれ等に對する樣々の批判のうち、上述せるベロオのそれ、即ち段階說を理念型的性質のものとする修正は、傾聽すべきところあるものと思はれる。然しその場合、理念型に於いて一面的高昇をなすべき觀點は、歷史學派の諸家の採用せる段階說構成の標準として揭げられた如き種類のものではないのである。ここに何等言及しなかつたベロオの批判はその不徹底さを顯にする。然しその批判は、同時にまた一つの問題をそのうちに含む。それは理念型自體に關する問題である。即ち理念型の性質の吟味が要求されることである。私は、ヴェバアの理念型は理論と歷史の統一を圖るものと做す見解を以て正しいと考へて居る。この意味に於いてそれは、あの理論と歷史との綜合を企てるものとして提唱されたシャックの經濟形態學と似るところあるものであらう。シャック自らの言葉によれば「經濟形態學の課題は、歷史的經濟形態の多樣性を終極的根源的形式に還元することにある」(5) ものである。そして經濟の根本形式は「主觀的か客觀的、靜態的か動態的、非合理的か合理的」であるが、この種々なる經濟形式は經濟に對する人間の特別な態度から引き出される。然も「根本的にはたゞ二つの經濟形式が存するのみ。一は主觀的・靜態的・非合理的、他は客觀的・動態的・合理的である。この兩極的對立の上に一切の歷史的及び一切の可能的經濟形式は秩序づけられる。」(6) そして「經濟的進步は、形態學的に見れば、この根源的對立の絕えざる出現とその相對的克服とのうちに存する。對立自體は殘存する。それが形態學の確定し得る終極のものである。ここに於いて吾々は人間的本質の最も深い特性に觸れるのである。この本質性は人間の運命である。それは人間の文化形姿の運命であり、人間の經濟の運命である」(7) といふ。然しこのシャックの試みは、畢竟吾々に、その內奧に潛む一つの根本問題、即ち理論と歷史の統一の要求を、吾々に强く關心せしめる契機をなすもののみに外ならなかつたやうに思はれる。敎へるところは大きいのであるが、經濟形態學そのものはヴァゲンヒュウルの評する如く、「シャックが經濟に對する人間の心理學的態度を基礎として觀察する場合、彼は經濟形態學の理念を歷史的に研究する經濟心理學に變えるのである」(8) とされるものであつた。然しこゝではこの經濟形態學を詳しく吟味する要はない。かかる試みがなされることからして、理論と歷史の統一の要求への道が開かれてゐることを擧示すればよいのである。ところで、かかる要求の成否は當然、學問の、或は社會科學の、限局しては經濟學の構造の吟味が先行して初めて決せらるべきものと云はねばならない。即ち謂ゆる理論・歷史・政策の統一、或は經濟理論・經濟史・經濟政策の統一の問題が、理念型或は形態學等を顧みつゝ明かにされて初めていま吾々が考察してゐる發展段階說が殘りなく論じ得ることになるのである。然し問題をここまで溯らしめ

ることは、この稿に於いては不可能であるから、私はこれを他の場所に於いて採りあげることにするであらう。

（4）私は歴史學派の段階説の中では、ヒルデブラントのものがすぐれてゐると思ふ。然しそれは、故大西教授の云はる る如き、ヒルデブラントの段階説の著想がヘエゲル哲學の精神に出づるもの、正反合の統一と看做さるるが故に、ではない。歴史學派の特徴と段階説の性質からして、これを他の諸説に比較して優つてゐるとするのである。その點から云つて、直接にはこの段階説に向けられたとも見られるドプシュの否定論は興味を抱かしめるものである。——大西猪之介經濟學全集第二卷、經濟原論上卷（昭和二年）三一三—四頁參照。

（5）Hubert Schack: Wirtschaftsformen; Grundzüge einer Morphologie der Wirtschaft. 1927. S. 161.

（6）Schack: Op. cit. S. 161-2.

（7）Schack: Op. cit. S. 163.

（8）Horst Wagenführ: Zur Frage einer Gestaltenkunde (Morphologie) der Wirtschaft. in Schmollers Jahrbuch. Jg. 52. (1928.) S. 811.

既述の如くこの説の批判者ベロオ、ドプシュはいづれも理論と歴史とを峻別してゐる。私見を以てすれば、このことが、彼等の批判をして全きものたらしめなかつたのである。(9) 歴史と理論の統一を容認して初めて眞の批判は加へ得ると私は思ふ。

（9）ここにあの大著、ゾムバァトの「近代資本主義」は顧みらるべき場所を見出す。

六

問題を經濟史の領域に限つて段階説を考察しよう。元來、經濟史は社會の經濟過程の發展と變革とを追求するのが目的である。即ち究極に於いては物的生産過程そのものが統一的全體として取扱はれる。從てこの點からして社會史、政治史、法制史等とは區別され、更にそれは謂ゆる下部構造の各部門の歴史たる農業史、工業史、商業史等の單なる總和でもない。乍然、下部構造は上部構造と相互作用して社會を形づくる故に、經濟史の對象は當然この兩者を含めての統一的全體の發展と變革とを追及することになる。從てこの研究にとつては、社會の經濟過程の諸形態を、歴史的發展系列に應じて、段階づけ、以てそれぞれの段階に特殊な發展法則を明かにすることが必要となる。かくして初めて諸段階の特徴は解明され、それ等の相互關聯と轉化とは示され得るであらう。云ふまでもなくこの相互關聯と轉化とは内的必然性を以て明かにされねばならない。ここに經濟史の理論的性質が存するのである。そしてまたここに發展段階の理論が要求される所以である。これによつて、種々なる歴史的時代の特性とその連繫と發展とが明かにせられるであらう。ではそれは如何にして段階付けられるのであらうか。簡單に云へば次の如くである。社會構成の基礎たる生産過程に於いては、『生産諸條件の所有者の、直接的生産者に對する直接的な關係』、即ち勞働力と生産手段との結合の關係が決定的契機であり、この關係を追及すること、即ち如何にして生産されるかを知ることによつて、吾々は諸時代の區別を爲し得るのである。云ふまでもなくこの結合の一定の形態たる生産樣式——即ち生産諸關係の基礎をなすもの——は固定的ではない。「その變化に伴ひ、生産の全性質が變化し、生産物の分配、分業の形姿、交換の方向と範圍、最後に社會の物質的及び精神的生活全體がその度毎に變化」する。(1) 勿論これ等の間には間斷なき相互作用が行はれ、ひとり前者の變化のみが後者を變化せしめるものではない。右に云ふのは究極的に於けるものである。そしてまたこの相互依存性が矛盾的であるといふ特性を帶びることも斷るまでも

ないこと」であらう。かかる矛盾的な相互作用の基礎の上に社會は發展する以上、それは連續的でなく飛躍的に段階付けられざるを得ないであらう。そしてその段階の各〻は、同一なるものの漸次的連續的成長を示すところのものでなく、それ等は相互に相異れる種類のそれぞれの統一的全體たるべきものである。素より新段階の中には舊段階の殘存物が見出される。そしてそれ等は前者の發展に種々なる影響を及ぼす。然し後者は結局遺物たるに過ぎないのである。かくの如く發展諸段階は生産様式を中心的契機として區別される。即ち勞働力と生産手段との「結合が行はれる特殊の様式に從て社會構造の種々異つた經濟的時期の上に區別が與へられる」(2)のである。社會の經濟過程の發展は、かくの如き段階付けによつて、それぞれの段階が全體的に考察され、同時に一段階から他の段階への轉化が全體的に捕捉され、以て歴史的發展系列に相應して追求されることが可能となるのである。

勿論かく構成せられた發展段階は理念型的性質を帶びる。それはそれぞれの時代の特殊性を理解する方法として必要なものである。それはすべての國、あらゆる時代にとつて普遍的に妥當すべき發展を指示するものでない。いづれの國に於いても純粋な段階は存しないであらう。舊段階の遺物と將來の萠芽とは、各〻の與へられた時代、與へられた國に於いて見出し得るところである。然もこのことが現實に存するが故にこそ、發展段階の理論によつて歴史的特殊性を知る必要があるのである。この發展段階のそれぞれは、社會の經濟過程の發展の一般的な方向を示すものに過ぎない。すべての國に於いて、又あらゆる民族が、この發展の道を同一の速さで進むものではなく、正確に同一の過程を經たものではない。「然し縱令個々に於いては地方色が多様に變つても、全體に於いては同一のまた少くとも同種の發展方向がある。」(3) これがこの發展段階の理論によつて解明せられるところである。そこにこの理論の理念型的性格が存すると云はねばならない。それは歴史過程の理解の爲めの重要な方法なのである。

(1) Rosa Luxemburg: Einführung in die Nationalökonomie. hrsg. von P. Levi. 1925. S. 136.
(2) 高畠素之譯　資本論　第二卷（大正十五年）二〇頁。
(3) Heinrich Cunow: Allgemeine Wirtschaftsgeschichte. Bd. I. 1926. S. 26.

かくの如き各時代、各國土の特殊性を吾々に理解せしめるところの發展段階説は、經濟史研究にとつて缺くべからざるものであることは云ふ迄もない。これを缺くときに於いて、歴史現象はその本質に於いて捕捉されぬ結果を生む。例へば段階説を否定したドプシュが、資本主義の發端をカロリンガア時代のグルンドヘルシャフトに求める(4)——尤も彼はこれを自然經濟的資本主義と名付けるのであるが——或はプレンタアノが十一世紀の伊太利沿岸の商業都市の戰爭企業（Kriegerischen Unternehmungen）に於いて近代資本主義が形成されたとする(5)　如きこれである。素〻これ等は資本主義なる概念に甚だ廣汎なる内容を與へて初めて云はれ得るところであり、かくてはゾムバアトが揶揄する如く、「いまや當然、資本主義なしには如何なる時期も經過しない」といふことになる。進んでは、「資本主義の證明はタキトス時代の古獨逸にも當て嵌る」(6)と云はねばならないであらう。結局それ等は資本主義概念の規定の明確を缺くといふよりは寧ろその規定を斷念したが爲めに生ずるところである、それはその規定の根源たる資本主義的生産様式に就いて、その段階の歴史的特殊性に就いての無知より出づるところであると云はれよう。吾々が段階説定立を説く一つの理由は、かかる誤謬に再度陷ることなからしめんが爲めである。

(4) Dopsch: Op. cit. S. 236.
(5) Lujo Brentano: Die Anfänge des modernen Kapitalismus. I. I. 1928. S. 45.
(6) Werner Sombart: Der moderne Kapitalismus. 1916. S. 34.

本稿の始めに掲げたヴィコの命題によつて、「事物の性質は、一定の時の經過に於ける且つ一定の狀態の下に於け

るその成立に外ならぬ」と說かれた事物の歷史性は、發展段階說によつて、それぞれの段階に於ける具體的歷史的特殊性が明かにされて、完全に把捉されるところである。彼の云ふ人間は、吾々に於いては社會的人間として解せられなければならない。そして彼の說くところの、人間の惡德を嚮導する神の攝理とは、まさに生產樣式であつたのである。かく置き換へられて、初めて吾々の學問の本來の課題は明かにされる。そこには最早、回顧的なる、或は觀想的なる態度は、顧みらるべき價値を全く喪失しつくしてゐるのである。吾々が發展段階說の構造を吟味するに當つて、このことは、根本的に把握され理解されてゐなければならないであらう。發展を知らざる發展段階說、それが從來のそれ等であつたのである。

# 科學と社會事業

小島榮次

## 一　科學と社會事業

社會事業が今日の米國に於いて一自由職業として認められつゝあることは、本誌九月號所載の拙稿「米國社會事業概觀」に述べた所である。職業的社會事業は諸科學の成果を社會事業問題の診斷及び取扱に適用しようとするものであつて、素人の特志家に依つて行はれた舊來の慈善事業又は博愛事業と全く異なる。職業的社會事業家は醫師・辯護士等に似た特殊の專門技術家として、依賴者の爲めにその知識と技能とを役立てるのである。故に科學と社會事業とが極めて密接な關係を有して來ることは明かである。就中應用社會學の如きは、犯罪・感情性犯罪・囚人取扱法・家庭破壞・文化的並びに人種的等の社會的諸衝突・貧困・兒童問題・公衆娛樂・公衆保健・身體及び精神衞生・等、社會事業が取扱ふと同じ對象に就いて研究を行ふが爲めに、從來社會事業知識は應用社會學と稱せらるゝことがあるが、社會事業知識は本來技術であつて科學ではない。技術は多數諸科學の成果を實踐に利用するものであり、科學と異なつた任務・動機づけ・目的・を有する。「技術はその取扱ふ諸材料に作爲しそれらを統制し變化せしめるが、科學は單にそれらを理解しようとするのみである。技術は個別化し科學は普遍化する。石に彫刻すると人間行動を變化せしむるとを問はず、技術はその具象的體現に生きる。科學は具象的世界から放射するとそれが發